

# 「あなたの信仰があなたを救った」 挽地茂男

(マルコ 10 : 46 - 52)

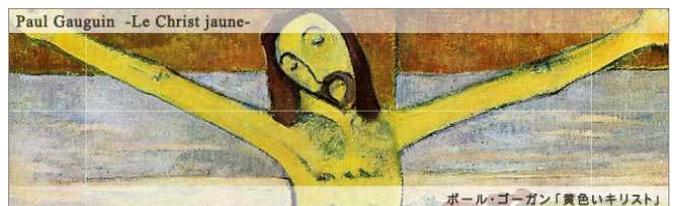
2018.9.16 日本基督教団千歳丘教会



マルコ福音書のテーマは、一言で言うと、「**この方(主イエス)は一体何者なのだ**」という言葉に集約することができます。この言葉は実際には、4章の湖上の嵐の場面で出てくる言葉です。夜のガリラヤ湖、その湖上で一行の乗った舟に襲いかかる嵐を、主イエスが「黙れ、静まれ」と一喝して沈めてしまわれると、4章41節、弟子たちは非常に恐れて「**いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか**」と驚きの声を上げます。マルコ福音書の前半は、このような奇跡物語を多く記して、メシア(救い主)である神の子イエスの姿を描きます。そして「**ベトサイダの盲人の癒し**」(8:22-26)の奇跡が前半最後の奇

跡として記され、前半が閉じます。この「**ベトサイダの盲人の癒し**」(8:22-26)の奇跡は、配置から見ても、大きく福音書の前半と後半の「区切り」あるいは「つなぎ目」を示しています。

そして8章27節で福音書が後半に入ると、その冒頭で、主イエスは弟子たちに「**人々は、わたしのことを何者だと言っているか**」と問います。弟子たちが「『**洗礼者ヨハネだ**』と言っています。ほかに、『**エリヤだ**』と言う人も、『**預言者の一人だ**』と言う人もいます」と民衆のもつ通俗的なイエス理解を報告すると、主イエスは「**それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか**」と再び弟子たちに問います。するとペトロが「**あなたは、キリスト(新共同訳「メシア」)です**」と答えます。これが福音書の前半から結論される、「**この方は一体何者なのだ**」という問に対する答えなのです。しかしそれは正しい答えの一面なのです。だから、この答えを聞くと、主イ



イエスはすぐに弟子たちにこのことを誰にも言わないようにと沈黙を命じ、ご自分の受難を予告し始めます。マルコはこう記しています。8章31節。

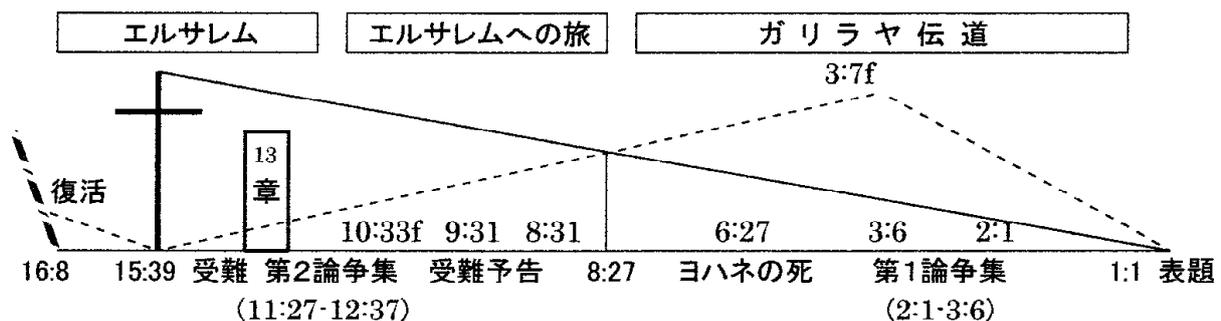
それからイエスは、人の子は苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。

「教え始められた」という最後の一言に注目が必要です。イエスが教え始めたと書いています。では、教えの内容、つまりその授業内容は何でしょうか。受難です。このあと同内容の受難についての教えが、さらに2回繰り返されます。つまりこの最後の一言は、主イエスの受難についての教育課程が、この時点から始った、と言っているのです。こうして福音書の後半は、8章、9章、10章の各章に

「受難予告」を配し、奇跡物語を特別なものだけ(2回のみ)に絞り込んで、主イエスが「**一体何者なのだ**」という問に対する答えのもう一つの重要な側面について教え始めるのです。それは11章のエルサレム入城の直前まで続きます。11章に入ると、主イエスの生涯の最後の120時間の出来事、つまり実際に受難の出来事が展開することになるのです。

さて先ほど触れた「ベトサイダの盲人の癒し」(8:22-26)の物語が、マルコ福音書の展開上の「区切り」あるいは「つなぎ目」を示しているように、今日の「盲人バルティマイの癒し」の物語も、福音書の展開上の「区切り」あるいは「つなぎ目」を示しています。「ベトサイダの盲人の癒し」の物語は、福音書の前半の「奇跡のテーマ」と、後半の「受難のテーマ」

【マルコ福音書における奇跡のテーマと受難のテーマ】



をつないでいます。つなぎ方については、後で触れます。一方、今日の「盲人バルティマイの癒し」の物語は10章の最後つまり11章の直前にあって、主イエスの受難についての教育課程の区切りを示しています。10章で、主イエスの言葉による教育(教習)が終わります。11章からは、エルサレムに場所を替えて、現実の受難にさらされる実践教育(実習)が始まるのです。すなわちこの「盲人バルティマイの癒し」の物語は、11章から主イエスと弟子たちが直面する実際の受難の予兆、あるいは導入としての役割を担います。以上2つの盲人の奇跡物語は、福音書の物語展開の上で、大切な「区切り」あるいは「つなぎ目」を示しているのです。

さてこのような盲人の癒しの奇跡や、また耳の聞こえない人の癒しの奇跡は「認知奇跡」と呼ばれます。「目が見える」ようになり、「耳が聞こえる」ようになりする奇跡です。目や耳の感覚器官が癒やされ、その認識能力が回復される奇跡を「認知奇跡」と呼ぶのです。認知奇跡がマルコ福音書では大切な所に配置されて

います。

認知奇跡は2つのレベルで理解される必要があります。1つは当然①**身体的なレベル**です。身体的な視覚や聴覚の回復のことで、実際に目で「見えること」や耳で「聞こえること」が回復される癒しのことをいいます。もう1つのレベルは②**象徴的なレベル**です。「見ること」や「聞くこと」は内面的な知覚や認識が開かれること、すなわち理解が与えられることを意味します。この目と耳という感覚器官を用いた象徴的表現は、旧約聖書の預言者の言葉に頻繁に出てきます。旧約の預言者たちは、イスラエルの民の内面的な無理解や、心のかたくなさ(頑迷さ)を非難するのに「**目があっても見えず**」「**耳があっても聞こえない**」という表現をよく使います。例えば、あの嘆きの預言者と呼ばれる預言者エレミヤです。エレミヤ書5章21-23節。



5:21 「愚かで、心ない民よ、これを聞け。**目があっても、見えず**／**耳があっても、聞こえない**民。

5:22 わたしを畏れ敬いもせず／

わたしの前におののきもしないのかと／主は言われる。…〔中略〕  
…5:23…この民の心はかたくなで、わたしに背く。彼らは背き続ける。

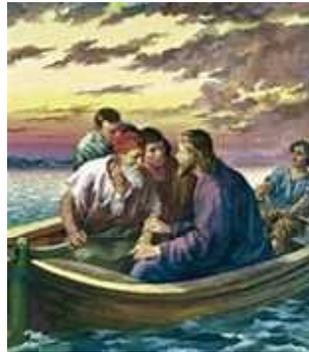
マルコ福音書のテーマは、一言で言えば「**この方は一体何者なのだ**」ということになる、と申し上げました。このことを前提にすると、認知奇跡の第2の象徴的なレベルが、イエス理解との関係で大切な役割を果たすことになるのは、容易に予想できます。

マルコ福音書には、「弟子たちの無理解」の記事がたくさん出てくることをご存知だと思います。認知奇跡は、この無理解と関係して大切な役割を果たします。「ベトサイダの盲人の癒し」(8:22-26)の直前(8:14-21)にも、そのような「弟子たちの無理解」の記事が出てきます。5000人の供食、4000人の供食の物語の文脈で語られる言葉です。主イエスが弟子



子たちに「**ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい**」(8:15)と注意を喚起すると、弟子たちは「**自分**

たちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合」(8:16)います。



その理由は、彼らが「**一つのパンしか持ち合わせていなかった**」(8:14)からだと言明されています。想像するに彼らは「5000人の時でもパンは5つ必要だったし」「4000人の時は7つも必要だった」「なんとと言っても1つじゃ少な過ぎる」と考えたのかもしれない。すると主イエスは彼らに向かって「**なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。8:18 目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。8:19 わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか**」と問います。すると

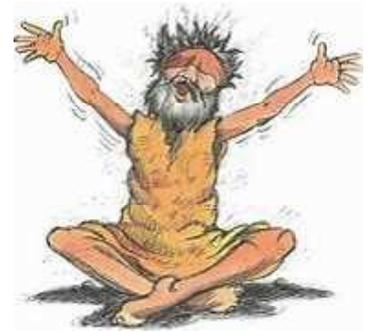


すると

弟子たちは「十二です」と答えます。続けて主イエスが8:20「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか」と問いますと、「七つです」と弟子たちが答えますと、8:21イエスは、「まだ悟らないのか」と繰り返します。そして弟子たちの無理解に対する批判の直後に「ベトサイダの盲人」の身体的な「目」の癒しの奇跡が続きます。こうして、象徴的な意味での弟子たちの「開眼」を示すフィリポ・カイサリアの信仰告白の準備が整います。このような認知奇跡の特徴を頭の隅に置きつつ、今日の物語を見てみましょう。

さて今日、イエスの一行はエリコに到着します。エリコでの出来事は詳しく書かれていませんが、エリコを出て行くときの様子が短く記されています。主イエスがエリコを出て行くときに「大勢の群衆」が一緒であったということから、エリコ滞在(宣教)の成功を物語っています。そのエリコを出てエルサレムに向かって行こうとされたとき、その大勢の群衆の動きを察知して、おそらく人に尋ねた

のでしょうか、主イエスのことを聞きつけて、「道端に座っていた」「ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞い」が「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び始めます。多くの人々が彼を叱りつけて黙らせようとしますと、「彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続け」ます。



群衆が彼を叱りつけて黙らせようとしたのはなぜでしょう。彼を「叱りつけて黙らせ」てもよい存在だと考えていたからです。群衆の目は、かれを「無資格者」、この場面に参与する資格のない者と見なしたのです。「無資格者」または「小さい者」に対する主イエスの目は、いつも温かです。わたしたちが「無資格者」とされるとき、主イエスはわたしたちを決して「無資格者」とはされないのです。神に造られた者として、すでに資格あるものとして扱われるのです。そして神の賜物に従って、ふさわしい恵みと働きを備え、自

分の人生を生きていく資格ある者として立ち上がらせてくださるのです。幼子たちが主イエスの所へ連れてこられたときもそうでした。弟子たちは、幼子たちに「触れていただく」資格などないと断定して、連れてきた人々を叱ったのでした。主イエスの言葉は慰めに満ちています。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのよ

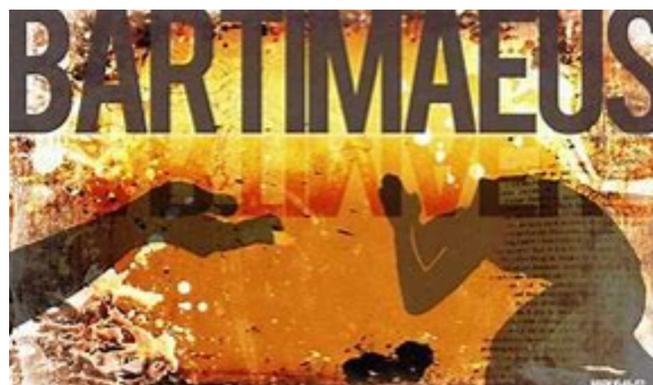


うな者たちのものである。10:15 はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(10:14-15)。

そして主イエスは「子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福され」(10:16)るのです。この箇所を扱ったときにお話ししましたように、神の国を表す素晴らしい視覚的イメージです。このイメージは、神学上の論理の言葉よりも雄弁です。主イエスがいて、子どもたちが主イエスの腕の中において、主イエスの手が子どもたちに置かれている、そしてそこに祝福があふれている、のです。資格を問う者たち

は、資格を問いつつ、彼ら自身が資格から遠く離れているということがあるのです。子どもたちの持つ資格とは何でしょうか、それは信頼です。バルティマイの資格とは何でしょうか。それは信仰です。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」信頼と信仰は同じものです。神様の御手に安心して委ねることなのです。そしてこれは、弟子たちの無理解という盲目を癒やすために、最も必要だったものなのです。

主イエスは「立ち止まって」バルティマイを「呼んで来なさい」と命じます。彼は「ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞い」で、その日も「道端に座っていた」と書かれています。バルティマイの「バル」はヘブライ語で「息子」という意味ですから、「ティマイの子で、バルティマイ」という表現は同じことを2回も繰



り返す、同語反復に近いしつこい言い回しなのですが、この表現にはバルティマイが父親ティマイの子として生まれてこの方、彼の誕生以来の人生が集約されているのです。これに似た表現が、マタイによる福音書の16章17節に出てきます。フィリポ・カイサリアで「あなたこそ、生ける神の子キリストです(口語訳)」と、ペトロが見事に主イエスに対する信仰を表明したとき、そのペトロに向かって主イエスが言います。「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉(人間)ではなく、天にいますわたしの父である(口語訳)。」

「バルヨナ」とは「ヨナ」の「子」という意味です。ちなみに「ヨナ」はギリシア語では「ヨハネ」ですので、ヨハネ福音書では主イエスは、受難の際に主イエスを捨てたペトロに向かって、彼の召命を再確認するために「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」(ヨハネ21:15)と呼びかけます。父親の名前まで引き合いに出すのは、ペトロのフィリポ・カイサリアでの「生ける神の

子キリストです」という信仰告白が、ペトロの誕生(人生の出発点)を含めた、彼の存在全体にとっての幸いであり、その召命がペトロの誕生(人生の出発点)を含めた全存在と関わるからです。今、バルティマイにとって、彼の出生・誕生を含めた、彼の存在全体にとっての幸いが来ようとしているのです。そしてそれは彼の主イエスへの信頼・信仰にかかっています。

バルティマイは「ダビデの子よ、わたしを憐れんで



ください」という言葉を連呼します。「ダビデの子」という呼称は、あのイスラエル王朝随一の賢王ダビデの子孫からメシアが現れるという、イスラエルの伝統的なメシア理解を示しています。主イエスはここでは、「ダビデの子」と呼ばれることに何の異論もはさんではおられません。しかし、11-12章の「第2論争物語集」の中の第6論争(12:35-37)では、メシアをダビデの子とする伝統的なメシア理解の誤りを指摘しています。おそらくバルティマイは、メ

シアに関しても、メシアの呼び方についても、人に語るような知識も理論も持ち合わせてはいなかったでしょう。メシア(救い主)を「ダビデの子」と呼ぶ理論的整合性についても知らなかったでしょうし、そんなことはどうでも良かったでしょう。彼は、救い主を「ダビデの子」と呼ぶことは知っていました。それがメシアについてバルティマイのもつ知識のすべてだったかもしれません。彼は1つ覚えの「ダビデの子」を連呼するのです。主イエスはその「呼び方が正しいか」などという論理によってはすくい取られない、バルティマイの心の叫びを聞き取ります。

「あの男を呼んで来なさい。」主イエスの招きに、盲人バルティマイは「上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに」やって来ます。彼が脱ぎ捨てた上着は、乞食である彼への人々の憐れみをそそる、貧しくて汚れた着衣であったでしょう。その衣は、彼のこれまでの過去のすべてを示しているかのようです。

上着を脱ぎ捨てて、躍り上がってやって来たバルティマイに主イエスが尋ねます。「何をしてほし

いのか。」バルティマイは答えます。「先生、目が見えるようになりたいのです。」今度は、あのベトサイダの盲人の癒しの時のように、込み入った手続き——盲人の目に唾を塗り、手を置くなどの所作——はまったくありません。一言でした。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」そして彼の目に光が



さします。まるで天地創造の時に神が「光よあれ」と言われて、光が生じたかのようなのです。バルティマイは癒やされて、その目に光が回復し——「行きなさい」と言われたのに、社会や家族の元に戻るのではなく、すべて〔といっても乞食の持ち物のすべて〕を捨てて——エルサレムに向かっ行く主イエスと同じ受難の道を、弟子たちと共に従ったのでした。



エリコを出発して、エルサレムへ向かう道は、あの「善きサマリア人の譬え」の舞台となった道です。主イエスと弟子たちとバルティマイを含めた大勢の群衆が、エルサレムへと上っていきます。エリコは海拔でマイナス250m、海面より250mも低い位置にある町です。向かって行くエルサレムは海拔平均750mのちょっとした山の上にある都です。両者の標高差は1000m。エリコからエルサレムまでの距離は直線にして20km。その短い距離を行くのに、1000mもの標高差を上



らなければならぬのですから、おっつけぐねぐねと蛇行する、日光のいろは坂や、箱根の山のような坂道を、善きサマリア人の譬えとは逆コースで上っていくことになります。大勢の群衆が、エリコの町の入り口でイエスの一行を見送って自分たちの家に引き返すことをせず、わざわざその20キロもの坂道を同行したのは何故でしょうか。何がそうさせたのでしょうか。……彼

らは、バルティマイが癒やされるのを見たのです。彼らには、主イエスがこれから上っていく花の都エルサレムで何かが起こるのは当然のことのように思われます。そしてついに、その坂道を上り詰めてエルサレムの都が視界に入ります。ロバが主イエスの指示どおり用意されていました。ロバを連れてきた者が自分の服をロバに掛けると、主イエスはそれにまたがり、行進が始まりました。旧約の預言(ザカリヤ9:9-10)の通りの、入城行進です。そうとは思いの至らない人たちには、イエスが——凱旋入城にふさわしい軍馬ではなく——ロバに乗っておられることに多少の違和感があったものの、しかしあの盲人の目を癒やしたイエスです。大勢の群衆は、自分の服を道に敷き、また葉のついた木の枝を敷いて、王の通る道をつくるのでした。そして、主イエスの「10:9……前を行く者も後に従う者も叫」びます。「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。11:10 我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」そうです「ダビデの子



よ、わたしを憐れんでください」と叫んで癒やされた盲人のバルティマイの事件が、

火に油を注ぐように、群衆の行進を加速させ、彼らの歓呼の声を強くしていたのです。盲人バルティマイの癒しの出来事が、エルサレム入城の気分を支配しています。「**我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。**」今「ダビデの子」イエスが父ダビデの国を治めるために、ダビデの建てた都に足を踏み入れた、と群衆は思うのです。

しかし違うのです。主イエスは奇跡を行う栄光の王として来られたのではないのです。ロバに乗って平和の王として神の都に戻ってこられたのです。しかし人々の歓呼の声は止みません。「**我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。**」ファリサイ派やヘロデ派の人々、それにサドカイ派の人々をも含め、祭司長、律法学者、長老たちはもう準備を整えて、主イ

エスのパレードを見ていました。戦利品や武器や兵士の行列もない、貧しい民衆が騒ぎ立てるだけの奇妙なパレードでした。それでも運命の時は近づいていました。主イエスも自分の運命を、しかと自覚しておられました。「**ルカ13:33 だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。13:34 「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ……」**エルサレム入城を前にして、主イエスが語られた言葉でした。しかし弟子たちは、このエルサレムで—イエスが成功した暁には—自分たちの人生にとっての**最大の好機**<sup>ビッグチャンス</sup>が訪れると考えてたのでした。一方群衆は、目撃した奇跡に、自分たちを救う新しい王（メシア）が到来したと歓呼の声を強めて、叫び続けていたのでした—その彼らが無力なイエスに背を向ける時がまもなくやって来るのです。その声とは対照的に、宗教指導者たちは、<sup>おもて</sup>面に表すことなく殺意を固くしていました。

「孤獨は山になく、街にある。一人の人間にあるのではなく、大勢の人間の「間」にあるのである」と言ったのは、三木清ですれども〔三木清『人生論ノート』より〕、弟子たちと大勢の群衆に囲まれ、また、その歓呼の声を耳にしながらも、主イエスは深い孤独の中におられたのではないのでしょうか。

マルコ11章からは、場所をエルサレムに移して、受難の実践教育が始まります。主イエスはかつて、この時代(世界)を指してこう言われました。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならぬのか」(9:19)。また「神に背いたこの罪深い時代」(8:38)とも言われたのでした。エルサレムはまさにこの言葉どおりの都でした。このエルサレムで、救いを成就するために、十字架に向かって行く主イエスの戦いを、弟子たちは最後まで見届けなければなりません。その最後にテストが待っているのです。その最後に、主イエスは十字架上に生命を献げ、弟子たちは恐怖して自分たちの生命を守るために逃走します。



「この方は一体何者なのだ」という問に対する答えは、主イエスの十字架にこそ示されます。一人の異邦人、ローマの兵士の口を通してそれが明らかにされます。

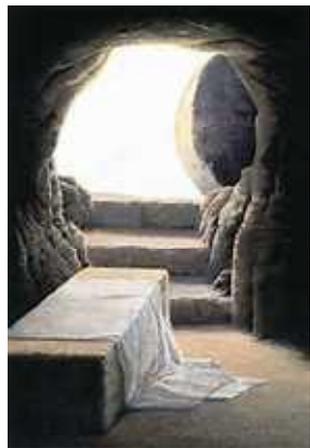
15章39節。

15:39 百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

福音書前半の奇跡的な出来事の累積とその権威ある新しい教えから結論される奇跡的な神の子イエスと、後半の受難予告とエルサレムでの受難から結論される受難のキリストが、つまり2つのイエス理解が、十字架の上で1つになるのです。わたしたちの主イエス・キリスト、受難の神の子の姿がそこにあります。

しかし弟子たちには、十字架は

恐怖以外のものではありませんでした。理解など到底できませんでした。主イエスの教えた愛と平和の教えも、人々が目撃した驚くべき御業も、ローマの強大な軍事勢力と、ユダヤ伝統宗教の指導者



たちの圧力の下で、歴史に咲いたあだ花のように枯れ果てて、姿を消そうとしていたのです。

しかし、間もなくして、主イ

エスの納められた墓から、新しいメッセージが語られ始めたのです。キリスト教という宗教は、イエスの墓から始まるこの新しい生命のメッセージを語る語り手として起こったのです。このメッセージがすべてを覆し始めます。復活の主に出会った弟子たちは、自分たちの失敗をなおも赦し賜物と使命を与え続ける方を見だし、主イエスの復活から受難の意味を理解し、仕える者の姿にいと高き神の姿を見たのです。彼らの信仰の目に光がさしたのです。長い教育の課程の末でした。彼らを捕らえていた恐怖は勇気へとかわり、

人生の闇は主の光によって払いのけられていったのです。

使徒言行録（9:1-19他）はパウロと復活のイエスとの出会いを描きます。その回心の様子を劇的な調子で伝えています。キリスト教徒への迫害を拡大するためにダマスコに向かっていた途上で、パウロは「突然、天からの光」を受けて視力を失います。そして地に倒れたサウル〔パウロの旧名〕は彼に呼びかける声を聞きます。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。」そして「主よ、あなたはどなたですか」と問いかけると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と返答が返ってきます。そして主イエスが告げた通りに、失明したパウロの許に、まもなくして、アナニアという神の人が遣わされます。アナニアがパウロに手を置いて祈ると目からうろこのようなものが落ちて、パウロの目に光が戻ります。こうしてキリスト教撲滅を目指していたパウロ



は、迫害者からキリストの福音を伝える宣教者に変えられたのでし

た。パウロ自身も自分の言葉で、抑制した調子ですが、その出来事を語っています。コリントの信徒への手紙二 4 章 6 節。

4:6 「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」

そしてこの光がパウロの生涯を導き続けることになったのです。

わたしたちが幼子のように、信頼を持って心の扉を開くとき、わたしたちの心に、「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る」温かい光が、射し来たるのです。

2018.9.16 日本基督教団千歳丘教会

